

保育内容「人間関係」

— 持続可能な開発のための教育（ESD）の観点から —

“Interpersonal Relationships” in Childcare

— From the viewpoint of Education for Sustainable Development (ESD) —

山 村 けい子*

(平成31年1月23日受理)

要約

はじめに保育内容には、5つの領域がありその中の1つである領域「人間関係」が、領域「社会」からなぜ変遷していったかを明らかにした。その変遷の中で家庭や地域社会の変容にともない「人間関係」も変容してきた。そして、領域「人間関係」の授業の中で学生に「人のつながり」について問いかけた。その結果、社会が抱えている課題がうかがえ、「持続可能な開発のための教育」(ESD)における「人と人とのつながり」、「人と社会とのつながり」、「人と環境とのつながり」という観点から課題解決について領域「人間関係」の中で今後明らかにしていきたい。

キーワード：人間関係、保育、持続可能な開発のための教育

keywords：Human Relations, Childcare, Education for Sustainable Development

1. はじめに

乳幼児期は、子どもの人間形成の基礎をつくる大事な時期である。そしてその時期には多くの人との関わりがあり、その中で人間形成を築いていく。子どもを取り巻く人間関係の中で教えられたり、みずから学ぶ中で「生きていくこと」の基盤を身につけていくのである。

そして、子どもは生きている現在の社会から様々な影響を受け、特に子どもの「人間関係」は現代社会から大きな影響を受けている。人間の社会環境の中で子どもを取り巻く人間関係をとおして、様々なことを学んでいく。子どもにとって最初の人間関係である親子関係から人間としての信頼関係を学び、それをもとにして、自分の探索領域を広げて行く。幼稚園、保育所に入って、同じ年齢の子ども達と関わりあいながら、集団生活の基礎を学んでいく。そしてその学びは、親、教師などといった子どもを取り巻く大人から人間社会の規範を教えられる。また、子ども自身で学ぶこともある。「人間関係」を育てていく子どもを取

り巻く環境にも注目をする。子どもだけでは、人間関係の方法を育てることはできないが、子どもを取り巻く様々な環境の中で育っていく。

現在においては、都市化することによってもたらされた地域関係、近隣関係の衰退は、地域の子ども関係の衰退化のもつながっている。農村地区のような大家族は少なくなり、核家族、少子化によって家族の規模も縮小型の一途を辿っている。

これらの背景により、昨今では、人間関係を育てる環境の力が弱まってきているのは明白であり、子どもの「人間関係」が希薄になってきていることは、現実問題としておおいに懸念される点である。

そして持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development (ESD) においては、「従来の環境教育は人と自然との関係を改善していくことが目的であり従来の人権教育や平和教育は人と人、人と社会との関係を改善していくことが目的であった。これらをトータルして総合的に見ていこうというのがESDである。現在の人と

(*やまむらけいこ 保育科講師 幼児教育・保育)

自然、人と人、人と社会とのつながり（関係性）ではもはや私たちも他の生物種、未来の人も持続しない」とあるが、ではどんなつながり（関係性）ならば持続するのだろうか。「その新たな（もう一方の）つながりや関係性を想像し、想像したつながり（関係性）＝社会を創造する力、すなわち2つの想像力を育むのがESDである」¹⁾とある。この持続可能な開発のための教育（ESD）については、後で述べることにし、保育内容「人間関係」と関連させながら現代の課題について検討をしていく。

また、先行研究の永野2006（平成18）年の研究においては、この保育内容の「人間関係」について「幼稚園教育要領や保育所保育指針の五領域の1つに領域『人間関係』がある。人間関係は本来人的環境という意味では領域『環境』に含まれると考えられる。けれども乳幼児の人間関係の発達はこの時期の子どもにとって重要であることから環境とは別に人間関係の領域を設けたと考えられる」²⁾と説明をしており、「幼稚園教育要領の変遷と領域『人間関係』」について述べている。

ここで「変遷」についての理解が必要である理由は、領域「人間関係」のねらいと内容をより理解することにより現在の領域「人間関係」になったことから課題に対して解決する道筋を見つけ出し、持続可能な社会づくりへの基盤となるように考えていきたい。

2. 研究目的と方法

(1) 研究目的

これらのことを踏まえて家庭や社会の教育する力を再び蘇らせるためには保育所、幼稚園、こども園が核となって地域のネットワークを再構築し、意識して子どもの「人間関係」を育てる必要がある。

家庭や地域社会の変容によりもたらされた人間関係を明らかにしてした上で保育内容の「人間関係」の課題について解決する方法を模索するうえで、保育内容「人間関係」が、持続可能な開発のための教育（ESD）の観点とどのような関係があるのかを研究の目的とした。

(2) 方法

本学には、2年間で学ぶ2年制の保育科第一部と3年間で学ぶ3年制（授業は午前中のみ）の保育科第三部の2つの学科がある。

まず第一部1年生46名、第三部2年生44名の学生90名を対象に保育内容「人間関係」の授業の中で「人のかかわり・つながり」について、それぞれ経験した中で思うところを述べてもらった。時間は約20分間とした。

(3) 結果

1) 第三部2年生のレポートから次のような結果になった。

①人と関わることで大切なことは何か

(表1)

項 目	人数
「人との関わり・つながり」は人が生きていくうえでとても大切である。	42
相手の気持ちを理解したり、思いやりを持つことができる。	10
コミュニケーションをとることが大切である。	8
自分を表現することができたり、成長につながる。	8

②どのような人との関わりがあるか

(表2)

項 目	人数
友達	42
親	22
保育者	16
地域の人	8

(表1)の結果では、「『人との関わり・つながり』は人が生きていくうえでとても大切である」が一番多かった。(表2)からは、「友達」が一番多く出てきており、親よりも倍近く差がある。

2) 第一部1年生のレポートから次のような結果になった。

①人と関わることで大切なことは何か
(表3)

項 目	人数
「人との関わり・つながり」はとても大切である。	42
自分の考えを言ったり、発見があったり、相手の価値観を知ったり、自分自身が成長ができるので大切である。	23
コミュニケーションをとることが大切である。	6
人と関わることは良いことばかりではないが、人生においては大切である。	2

②どのような人との関わりがあるか
(表4)

項 目	人数
友達	25
親	7
保育者	6
地域の人	2

(表3)からも「『人との関わり・つながり』はとても大切である」とあるが、少し違うのが「生きていくうえで」という言葉がなかった。(表4)もやはり「友達」が一番であった。

(4) 考察

第三部2年生と第一部1年生と共通しているのは「人と関わることで大切なことは何か」という点においては、「『人との関わり・つながりはとても大切である』」と書かれていることが一番多かった。学生自身が人との関わりが苦手だということを書いていた人も数名いたが、多くは、「子ども」に対してであった。具体的に「大切なこと」として、2番め以降に挙げたが、この点は、第三部2年生の学生と第一部1年生の学生との違いが明らかになった。第三部2年生は、「相手に対して」の感情であるが、第一部の学生は、「自分自身に対して」の感情で「成長」という言葉で表現をしてい

る。

とても面白い結果が出たと同時に「人間関係」というのは、やはり「相互関係」であるということが、この結果からもよく分かった。

「②どのような人との関わりがあるか」という点では、レポート中に出てくる回数で表した。「人」という「一般的」な呼び方を第一部1年生は多かったが、第三部2年生は、具体的な人を挙げていたので回数も多いのである。これは、学年が一つ上であり、実習も2か所終えているからだろうと推測される。

他国の人との関わりは、1名だけであったが近くに住んでいたということで「地域の人」の中に含むことにした。しかし、数の多い順番は、同じであった。自分たちの経験だけではなく、保育実習を終えているということもあり、「友達」が圧倒的に多かった。この「友達」という点に注目してみると学生が「人間関係」という授業や実習からこのような考えを導き出したのであるが、これは学生の人間関係ではなく、あくまでも「子ども」に対してつまり「保育」の中での「人との関わり」に重きを置いて述べているのだと考えられる。

しかしここで考えておきたいのは、必ずしも「人との関わり」について「良いこと」だけではないことにも触れておきたい。

第一部1年生の2名が書いていたが、「人間関係」においては「良いこと」だけではないが、それも含めて「人間関係」であり、この点については、学生自身の経験からだと思われる。保育の中でそれをどのように今後伝えるのが、課題である。

また、「人との関わり」の中には、「共感」という言葉が出てくる。学生の1人もそれに特化して書いていた。「良いこと」だけに共感するのではなく、「悪いこと」にも「共感」することがあるのではないかと、いうのである。確かにそのとおりである。それが、「いじめ」につながるのではないかと。この点に気付いたのはこの学生だけであり、貴重な意見である。

この点についても保育の中でどのように子ども達に伝えて行くのかが、また課題の一つになる。これらを総合的に考えると「人間関係」という保

育内容は、極めて人が生きる上で大切な内容ではないかと改めて考えさせられる。

次に2018（平成30）年から幼稚園教育要領、保育所保育指針の改訂では、どのように改訂されたのかをみることにする。

3. 幼稚園教育要領と保育所保育指針における「人間関係」について

幼稚園教育要領が2018（平成30）年4月から改訂されたが、まず、幼稚園教育要領の前に「学習指導要領」に触れておくことにする。

(1) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）【概要】」について

まず「第1部 学習指導要領等改訂の基本的な方向性」から次のようなことが書かれている。

「第2章 2030年の社会と子供たちの未来（『生きる力』の育成と、学校教育及び教育課程への期待）こうした力は、これまでの学校教育で育まれてきたものとは異なる全く新しい力ということではなく、学校教育が長年その育成を目指してきた『生きる力』を改めて捉え直し、しっかりと発揮できるようにしていくことである。時代の変化という『流行』の中で未来を切り拓いていくための力の基盤は、学校教育における「不易」たるものの中で育まれる。今はまさに、学校と社会とが認識を共有し、相互に連携することができる好機にあると言える。学校教育がその強みを発揮し、一人一人の可能性を引き出して豊かな人生を実現し、個々のキャリア形成を促し、社会の活力につなげていくことが、社会からも強く求められている」³⁾

(2) 第3章 「生きる力」の理念の具体化と教育課程の課題

ここでは、「1. 学校教育を通じて育てたい姿と「生きる力」の理念の具体化」ということでもっと具体的に「生きる力」について述べられている。

「教育基本法が目指す教育の目的や目標に基づき、子供たちの現状や課題を踏まえつつ、2030年とその先の社会の在り方を見据えながら、学校教育を通じて子供たちに育てたい姿を描くとすれば、以下のような在り方が考えられる。社会的・職業的に自立した人間として、我が国や郷土が育んできた伝統や文化に立脚した広い視野を持ち、理想を実現しようとする高い志や意欲を持って、主体的に学びに向かい、必要な情報を判断し、自ら知識を深めて個性や能力を伸ばし、人生を切り拓いていくことができること。

対話や議論を通じて、自分の考えを根拠とともに伝えるとともに、他者の考えを理解し、自分の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたり、他者への思いやりを持って多様な人々と協働したりしていくことができること。

変化の激しい社会の中でも、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生や社会の在り方を考え、試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていくことができること」⁴⁾

ここでは「生きる力」とは「自分」一人が生きるということではなく、「自分の考えを根拠とともに伝えるとともに、他者の考えを理解し、自分の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたり、他者への思いやりを持って多様な人々と協働したりしていくことができること」とあるように「他者」を意識し、「集団」の中で「生きる」ということを示唆しているのである。

最後には「具体的な方向性」としてどいったことが「幼児教育」望まれるのかを考えてみたい。

(3) 「第2部 各学校段階、各教科等における改訂の具体的な方向性」

「第1章 各学校段階の教育課程の基本的な枠組みと、学校段階間の接続」として次のような「方向性」となった。

「幼児教育」においては、「幼児教育で育みたい資質・能力として、「知識・技能の基礎」、「思考力・

判断力・表現力等の基礎」、 「学びに向かう力、人間性等」の三つを、現行の幼稚園教育要領等の5領域（「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」）を踏まえて、遊びを通しての総合的な指導により一体的に育む。また、5歳児修了時までには育ってほしい具体的な姿（「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量・図形、文字等への関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」）を明確にし、幼児教育の学びの成果が小学校と共有されるよう工夫・改善を行う⁵⁾としている。

「生きる力」を基盤に考えられており、幼児教育で育みたい資質・能力として、「知識・技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」を3つの柱として幼稚園教育要領も改訂がされてきた。幼稚園教育要領と保育所保育指針について読み解いておく必要がある。

まず2018（平成30）年4月から実施されている幼稚園教育要領の領域「人間関係」には、「ねらい」を定めており、「内容」でより領域「人間関係」を具体的に詳しく解説していた。以下にあげている。

他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。

1 ねらい

- (1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。
- (2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。
- (3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける⁶⁾。

次に保育所保育指針については、1歳児以上3歳児未満に関しても領域「人間関係」の「ねらい」及び「内容」はあるが、3歳児以上の領域「人間関係」と連動をしておき、ここでは、幼稚園教育要領は、幼児が対象であるので3歳児以上の

「ねらい」と「内容」を取り上げる。保育所保育指針では、「幼稚園生活」が、「保育所の生活」となっているだけで他の文言は、同じであり、改訂されてからは、幼稚園教育要領と同じであるので省略をする。

上記は、2018（平成30）年4月から4回目の改訂である。この改訂に至るまでには、「人間関係」という保育内容が時代の変化に伴い、「子どもの最善の利益」を考えながら変遷を繰り返してきた。

3回目の（平成20）年3月に改訂された「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」においては、「人間関係」としてのねらいや内容は、人間関係を中心に親、友だち、保育者、高齢者そして地域の人、そして外国人と人間関係が広がってきている。

では、ここで日本では、幼児教育の指針である「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」は、戦後何度か改訂されたが、その時の社会の変化に伴い、「人間関係」のねらいや内容も大きく変わった。

なぜ領域「社会」から「人間関係」として変わってきたのであるのか。変遷にも目を向けてみたいと思われる。

4. 領域「社会」から「人間関係」への変遷

以前は領域「社会」という領域が今の「人間関係」に関する内容を示していた。その領域「社会」が誕生したのは1956（昭和31）年の初めての幼稚園教育要領である。その中の1つが領域「社会」であった。1948（昭和23）年に出された「保育要領」の保育内容は、「見学」「リズム」「休息」「自由遊び」「音楽」「お話」「絵画」「製作」「自然観察」「ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居」「健康保育」「年中行事」の12の「楽しい経験」であった。楽しい経験ではあるが、それぞれの概念が、「抽象的」「具体的」すぎたために全体として教育課程の編成時に整理・統合することとなった。「ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居」は、「社会性の獲得」のための内容であり、「見学」は「社会認識を育てる」ための内容であり、「年中行事」は、「社会的生活の楽しさ」のための内容という事であった。

このように子どもの「社会性」を育て、「社会認識の基礎の獲得」と「社会生活の楽しさ」を育て

ようとまとめられたのが、領域「社会」であった。1956（昭和31）年版では、社会の内容を8項目に分け「望ましい経験」が示された。

「個人生活における望ましい習慣や態度を身につける」「社会生活における望ましい習慣や態度を身につける」「身近な社会の事象に興味や関心を持つ」の3つの項目に分けられ、「社会生活を行ううえでの基礎となる個人としての習慣・態度をまとめたものであり、幼稚園生活の中で社会性を身につけていくためのもの、そして、社会認識の基礎を築くためのもの」であった。

1986（昭和61）年に幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議が「幼稚園教育の在り方について」をとりまとめ、3点について取り上げた。「人とかかわりを持つ力の育成について」「自然とのふれあいや身近な環境とかかわり合いについて」「基本的生活習慣・態度の形成について」である。

1964（昭和39）年版ができた当時から比べ、子ども達を取り巻く環境も大きく変化して行った。核家族化が進み、きょうだいのいる子どもが減り、家庭外の「子どもの集団」が減少し、遊びが変わり、また、過保護の問題も出てきた。

1964（昭和39）年の「自然とのふれあいや身近な環境とかかわり合いについて」には示されているが、1989（平成元）年の領域「人間関係」のねらいには入ってこない。つまり領域「人間関係」のねらいには、領域「社会」のねらいにあった「社会認識の基礎」の育成は含まれなくなった。

そして、領域全体を見直した結果、再構成され、「幼児の発達の側面」からまとめられ、「幼児の人間関係の発達の側面からまとめられた。

「自分の能力を発揮できるようになることが他者との人間関係の基礎であること」「集団生活のなかで、自分とは異なる感じ方、考え方、思いなどをもつ人がいることに気づき、その人たちと積極的にかかわり、共感や思いやりが持てるようになること」「多様な人たち」と生活していくために社会的なルールがあり、それにそって他の人と生活していくことの楽しさや大切さを知ること」それが、社会的な生活を営むうえでの習慣や態度を

身につけることにつながる。これが「自立心を育て、人とかかわる力を養う」ことであり、まさしく、領域「人間関係」である。

そして「今日の世代のニーズを満たすような開発（持続可能な開発）を行うためには、すべての人が、人と人、人と社会、そして人と自然とのつながりを理解しようと努め、様々な問題を解決するためにはどのような取り組みが必要かを自ら考えるような視点を身につけ、行動を起こすことが必要である」とあるが、このことについては、次で述べることにする。

5. 「持続可能な開発のための教育」の概要

（Education for Sustainable Development）

「持続可能な開発（Sustainable Development: SD）を基調とした社会、つまり持続可能な社会を主体的に担う人づくりとして80年代後半以降、特に1992年の地球サミットで出された行動計画（アジェンダ21の第36条）を契機に国連が始めた人づくりに起因し、2002年のヨハネスブルグでの日本のNGOと政府による国連持続可能な開発のための教育10年の提唱（同年末の国連総会で決議され、2005年から開始）によって国際的に広まってきた活動である」⁷⁾とされている。

また、文部科学省における日本ユネスコ国内委員会の「我が国における『持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム』実施計画より『『持続可能な開発のための教育（ESD, Education for Sustainable Development）』は、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等、人類の開発活動に起因する現代社会における様々な問題を、各人が自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことで、それらの問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、もって持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動である。上述の様々な問題は総合に複雑かつ密接につながり、地球的な規模だけで解決することは不可能である」と述べられている。また、前述したが、「将来の世

代のニーズを満たす能力を満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発(持続可能な開発)を行う社会を実現するためには、すべての人が、人と人、人と社会、そして人と自然とのつながりを理解しようと努め、上記に掲げた様々な問題を解決するためにはどのような取り組みが必要かを自ら考えるような視点を身に付け、行動を起こすことが必要である。

そのような観点から、わが国は、持続可能な開発のための『教育』の重要性を国際社会において主張してきたところである⁸⁾と述べられている。

このようにESD(以下このように呼ぶ)の概要に述べられているように「人間関係」を地球規模で捉える考え方である。しかし、このESDにおいては、地球規模のように大きく捉えてはいるが、『DESD国際実施計画の『付属文書』では、定型的Formal・不定型的Nonformal・非定型的Informalな教育に取り組むことが必要とされている。『DESD中間報告書』2009(平成21)年では、特に不定型教育と非定型教育の充実を今後の課題としているが、焦点となるのは『構造化する実践』としての不定型教育であり、その典型的実践こそが『地域をつくる学び』を援助・組織化する『地域づくり教育』ないし『地域創造教育』なのである⁹⁾と述べられている。つまり「地域」作りの教育をしていこうというのである。

「地域」は「伝統的には、地縁的ないしは血縁的なつながりを中心とした住民が共同性にもとづいて形成してきた生活空間を意味するものとして捉えることができる。まさにコミュニティとしての地域である¹⁰⁾と述べており、地域とは人間同士の生活空間であり、つながりである。

学生のレポートでは、地域の人よりも子どもにとっては「身近な友達」との「関わり、つながり」だったが、将来保育者になる学生にとっては、「多様な人々」へもっと目を向けてもらい、幼稚園、保育所という枠組みから視野を広げてもらいたい。

そのためには「持続可能な開発のための教育」である「ESD」についてもっと理解を深めてもら

いところである。

次にESDを観点において幼稚園教育要領の改訂されたところを比較してみる。

6. 幼稚園教育要領改正の概要から現行との比較

今回の改正は、平成28年12月21日の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(以下「答申」という。)を踏まえ、幼稚園、小学校及び中学校の教育課程の基準の改善を図ったものである。以下抜粋である。

1. 改正の概要

(1) 幼稚園、小学校及び中学校の教育課程の基準の改善の基本的な考え方

教育基本法、学校教育法などを踏まえ、我が国のこれまでの教育実践の蓄積を活かし、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される子供たちが急速に変化し予測不可能な未来社会において自立的に生き、社会の形成に参画するための資質・能力を一層確実に育成することとしたこと。その際、子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視したこと。

知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視する現行学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成することとしたこと。体験活動の重視、体育・健康に関する指導の充実により、豊かな心や健やかな体を育成することとしたこと。先行する特別教科化など道徳教育の充実や・新たに「前文」を設け、新学習指導要領等を定めるに当たっての考え方を明確に示したこと¹¹⁾。

以上の「改正の概要」の内容からより具体的に改訂の内容が読み取れた。

そして保育内容の3つの「ねらい」の中から改訂以前は、「(2) 身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ」改定後は、「(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力し

たりして一緒に活動する楽しさを味わい愛情や信頼感をもつ」大きな違いは、「一緒に活動する楽しさを味わい」という点が、加わったのである。つまり「友達と一緒に活動をする」という「協同性」という点である。一人ではなく人と同じ「目的」を持って活動をする、「楽しさ」を味わい、「人との関わる」ことの重要性を伝えるのである。

また、「内容の取扱い」に関しては、改訂以前は「(2) 幼児の主体的な活動は、他の幼児とのかかわりの中で深まり、豊かになるものであり、幼児は其中で互いに必要な存在であることを認識するようになることを踏まえ、一人一人を生かした集団を形成しながら人とかかわる力を育てていくようにすること。特に、集団の生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信をもって行動できるようにすること」

改定後は「(2) 一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること。その際、集団の生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自分のよさや特徴に気づき、自信をもって行動できるようにすること。」「幼児の主体的な活動は、他の幼児とのかかわりの中で深まり、豊かになるものであり、幼児は其中で互いに必要な存在であることを認識するようになることを踏まえ、」という点においては、「まず自分のよさや特徴に気づき自分に力があると信じて取り組む」ことが、基盤となって集団の中で自己を発揮できるということであろう。

「幼稚園教育において育みたい資質・能力及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』では「1 幼稚園においては、生きる力の基礎を育むため、この章の第1に示す幼稚園教育の基本を踏まえ、次に掲げる資質・能力を一体的に育むよう努めるものとする」とある¹²⁾。

前述したことが、現行に新しく提示されたところであり、保育所指針にも書かれている。「自立心」においては、「身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したり、しながら、諦めずにやり遂げることで

達成感を味わい、自信をもって行動するようになる」とあり、「人間関係」の中で育つものである。

「社会生活との関わり」においては、「家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる」¹³⁾ この点については、学生にレポートの中に多く出てきた点と一致し、「人との関わり・つながり」という点では、コミュニケーションということを育てていくことにもつながる。

「人との関わり」が、乳幼児にとって重要であることは、明らかである。

7. 総合考察

「子どもは生きている現在の社会から様々な影響を受け、特に子どもの『人間関係』は現代社会から大きな影響を受けている」と前述している。現在、社会は、少子高齢化が進み、核家族化、地域力の脆弱化等が言われている。現代社会の影響を大きく受けるこの「社会」が、子どもが成長するには大きな課題となっている。「社会」といった大きなくくりではなく、もっと細分化をし、様々な課題を考えなくては大きな課題には辿りつけないように思われる。

この課題を解決するには一体どのような方法があるのだろうか。

初めての幼稚園教育要領である保育内容が領域「社会」であった1956（昭和31）年においては、「子どもの『社会性』を育て、『社会認識の基礎の獲得』と『社会生活の楽しさ』を育てようとまとめられた」とある。この頃の「社会性」とは、「小学校の社会科の誕生と同じく、戦前の皇民思想から民主的で平和な市民の育成という考えの転換」とある。つまり人間関係という事には重きを置かず、あく

までも「人間社会」という「生活」「労働」等に重きを置いた考えであったのではないだろうか。民主的な市民として生活を営むためには独立した人間として持つべき社会性と科学的に社会の事象を理解していく能力が必要でそれらの基盤の育成が目的であったのだろう。保育所、幼稚園等で「社会性」を身につけていくことを育成するためのものであった。

しかし、1989（平成元）年には、幼稚園教育要領が改訂され、領域「人間関係」として「子どもの主体性」を重視した内容に変わっていった。

「人とのかかわりを持つ力の育成について」、「自然とのふれあいや身近な環境とのかかわり合いについて」「基本的な生活習慣・態度の形成について」である。なぜ、変わっていったのだろうか。

時代背景が大きく関与をしている。少子高齢化が進み、核家族化、遊びの変化等の問題が出てきたからである。「人との関わりを持つ力」は、子どもを取り巻く環境の変化に対応するために変わったのである。「社会」を創っている「人間関係」が崩れ始めたのである。これは、人間が生きていくためには大きな課題である。環境も人間にとって良くない影響を与えている。その環境については、さらに詳しく領域「環境」で子ども達へ知らせ、保育者は、子ども達と一緒に考えながら保育をしている。

そして改めて「人間関係」に焦点を合わせたのである。まず、「自分の能力」を発揮し、「自己肯定感を育てる。そして他者との人間関係の基礎を育てる。

次に保育所、あるいは幼稚園という集団の中で自分とは違う考え、感じ方などを持つ人に出会い、その人たちと自分から積極的に関わり、「共感」や相手を「思いやる」という感情を持つようになる。多様な人々、多文化にふれ、一緒に生活するために社会的なルールを学び、生活することの楽しさや大切なことを知ることが社会生活の基本的な生活習慣を知ることにつながる。

これが、幼稚園教育要領、保育所保育指針にある「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」という

ことである。

「他の人々」とは、子ども達だけのことではなく、子ども達を取り巻く「すべての人」のことである。

「すべての人」との関わりについて考えてみたい。すべての人と関わりあうということはどういうことであるのだろうか。ただ「つながる」ことだけなのだろうか。子ども達にとって「人間関係」を学ぶという事はどういうことにつながるのだろうか。

広島大学附属幼稚園の研究発表の論文には、『『現行教育要領』にも『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』にも、『力を合わせて』『協力』『一緒に遊びを進めていく』など、他者との協力・協同にかかわる多くの文言が示されていた。また『他者の気持ちを理解』『互いの感じ方や考え方などに気づき、互いのよさが分かる』など、互いのよさを認め合うことの大切さについても言及されている。この内容は、一貫して大切にされている幼児期に育てたい資質や能力だと言えるであろう。これは『ESDで重視する能力、態度』とも合致するものである¹⁴⁾

前述した「持続可能な開発のための教育（ESD, Education for Sustainable Development）」である。

『『持続可能な開発のための教育（ESD, Education for Sustainable Development）』は、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等、人類の開発活動に起因する現代社会における様々な問題を、各人が自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことで、それらの問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、もって持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動である』¹⁵⁾である。

そして「今日の世代のニーズを満たすような開発（持続可能な開発）を行うためには、すべての人が、人と人、人と社会、そして人と自然とのつながりを理解しようと努め、様々な問題を解決するためにはどのような取り組みが必要かを自ら考

えるような視点を身につけ、行動を起こすことが必要である」¹⁵⁾とある。

子ども達が、「人間関係」をより潤滑に楽しい関係づくりができれば、今現在起こっている課題解決について「どのような取り組みが必要かを自ら考えるような視点を身につけ、行動を起こすこと」を学ぶ事ができるのである。

ユネスコの諮問機関である OMEP（世界幼児教育・保育機構）の世界総裁の朴恩恵は、「ESD は、乳幼児期から、高等教育、成人してからの教育、そしてフォーマルな教育を超えた一生涯に亘るプロセスである」と述べている。

つまり、乳幼児期からでも「教育」「保育」をしていく中で学習をしていき、子ども達なりに課題を解決するための方法を学んでいくのである。

少子高齢化、核家族化、地域力の低下等、社会の課題についても「人と人とのつながり」が「脆弱化」しているからこそその課題でありその課題を解決するためには、保育内容「人間関係」のねらいをもっと保育の現場で実践をしていき、このESDの人間としての「つながり」の重要性と関連させながら保育のカリキュラムを考えていく必要がある。このままでは、社会に「希望」は持たず、「体力」がなくなりやがて衰退していくのではないだろうか。

子ども達に輝く未来を担ってもらうためにも「持続可能な開発のための教育（ESD）」を推進していきたい。

〈引用文献〉

- 1) 佐藤真久・阿部治編著 (2014) 『ESD 入門』筑波書房 p12
- 2) 永野泉 (2006) 論文『保育内容「人間関係」に関する研究の動向 ―日本保育学会の研究発表を中心に―』
https://shukutoku.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item... p2
- 3)、4)、5) 中央教育審議会 (2016) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)』厚生労働省 p9、p13、p72
- 6) 『幼稚園教育要領解説』(2018) 文部科学省 p167
- 7) 佐藤真久・阿部治編著 (2014) 『ESD 入門』筑波書房 p11
- 8) 文部科学省 ユネスコ日本委員会 www.mext.go.jp/unesco (2018年10月18日閲覧)
- 9) 鈴木敏正他 (2014) 『環境教育と開発教育』筑波書房 p13
- 10) 鈴木敏正他 (2014) 『環境教育と開発教育』筑波書房 p68
- 11) 中央教育審議会 (2016) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)』厚生労働省
- 12) 『幼稚園教育要領解説』(2018) 文部科学省 p50
- 13)、14) 広島大学付属幼稚園 (2016) 『持続可能な社会の担い手の基盤となる能力・態度について (幼児版)』
- 15) 「ESD (持続可能な開発のための教育) 推進の手引」(改訂版) 文部科学省

〈参考文献・資料〉

- 1) 『幼稚園教育要領解説』(2018) 文部科学省
- 2) 佐藤真久・阿部治編著 (2014) 『ESD 入門』筑波書房
- 3) 『保育所保育指針解説書』(2018) 厚生労働省
- 4) 鈴木敏正他 (2014) 『環境教育と開発教育』筑波書房
- 5) 新学習指導要領 (本文、解説、資料等) 文部科学省
www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm
- 6) 広島大学付属幼稚園 (2016) 『持続可能な社会の担い手の基盤となる能力・態度について (幼児版)』
- 7) 「ESD (持続可能な開発のための教育) 推進の手引」(改訂版) 文部科学省
- 8) 民秋 言他 (2017) 『保育内容 人間関係』北大路書房